
職業：兄妹剣士

くるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

職業：兄妹剣士

【Nコード】

N4467BA

【作者名】

くるる

【あらすじ】

我ながら言うのもなんだが俺と妹は仲がいい。少し周りからひかれるくらいだ。俺はある日、前々から興味があったオンラインゲームをインストールしてプレイを始めようとした。それに興味を持った妹と一緒に覗き込んでいたゲームのホーム画面。それがいきなり輝いたかと思うと、次の瞬間には俺たちはゲームの世界にいた！？

いつもとは違う朝

「兄さん、起きてください……兄さん！」

ん、この声は妹の声だろうか。まだ遠くのほうから、そのかわいらしい声が聞こえてくる。毎日ありがとうな……。しかし人間とは学ばぬもので、この距離の催促はまだ、そこまでひっ迫した時間帯ではないということを俺はすでに学習し、知っている。なぜなら我が家のよくできた妹は最後には枕元までやってきてくれて、優しく「兄さん、兄さん」などいいながら肩をゆすってくれるからだ。それが俺の本当の起床の合図、その時点で起きればぎりぎり学校には間に合うのだ。すなわち、今は二度寝のチャンスである。

俺は妹の声が聞こえていないふりをして、もう一度布団を引き寄せた。ああ、あつたけえ。このぬくもりがあるから二度寝はやめられない。

そんな様子を妹は見止めたのか遠くから小さくため息をつく音が聞こえてくる。ごめんな、妹よ。けど、お兄ちゃん、寝たいわ。

「わかりました」

室内に小さい足音が響く。どうやらいつも通りに、俺の意図を汲んで後でまた起こしに来てくれるようだ。我ながらどうして俺たち二人がどうして兄弟なのかわからない出来の間違いだ……。ん、まてよ。

とんとんとん……

部屋から妹は立ち去り、離れていくその足音の音源。にもかかわらず足音とが徐々に大きくなってないか？

とんとんとん……

いや、間違いない。妹の足音は徐々に大きくなっている。しかしなぜだ？ふだんの妹なら間違ってもそんなことはしない。たとえ俺の狸寝入りに気がついていても、一步引いて弁当を作り、階段下へ向かうはずだ。なら妹じゃないのか。だとしたらそれは怖すぎるっ！そう思って俺は布団をはぎ、上半身を起こそうとしたところに……。

「おはよう！お兄ちゃんっ」

「ぐほつつおお……妹よ……どうして……」

なぜか妹の鉄拳が振り落された。おそらくは俺の腹部に向かって振り落されたであろうそれは、置きかけの俺の姿勢も相まって見事みぞおちに命中、再び俺をベッドの海へ沈めた。肺の中の空気が一瞬、強制的にすべて排出された……シャレにならんぞ……マジで。

「あ、あれ……あんまりうれしくくないですか？」

「誰がこんなのことされてうれしいんだよ！俺にそういう属性はないからな！」

妹は何やら驚いた様子で俺から一步引く。俺は息を整える。しばらくして、やっと上半身を起こすことに成功した。

「けどこないだ兄さんがみていたアニメの女の子はこうやって起こしてましたよね……？それ見て兄さんがすごい嬉しそうにしていた記憶があるんですけど……」

「いや、あれは「ただし二次元に限る」ってやつだから、現実世界でやると死者が出るから。俺も今逝きかけたよ……」

なるほどね……俺が視ていた深夜のアニメのワンシーン。妹が兄を

たたき起こすシーンがあつたな。だから普段の呼び方である「兄さん」ではなくて「お兄ちゃん」だったわけか……。妹にあんなもん見せてはいけけないな、教育上よろしくないし、このままでは俺が死んでしまう。

「そうなんですか。ごめんなさい、兄さん……。じゃあ、いつも通りに二度寝してください。私また起こしに来ますから」

「いまさら寝れるかいっ。もう気分爽快だよ、こんちくしょー」

拳みぞおちにたたきこまれて、目が覚めない奴なんていないだろう。しかも妹の小さい手は俺のみぞおちにジャストフィット、どこまで相性がいいんだよ、俺たちは。

「そうですか。じゃあ、兄さんは急いで支度をしてください。バスに遅れますよ?」

「へ……?」

「だから、バスが来てしまいます。時間を見てください」

俺は促されるがままに振り返り、今やその役目をまったく果たしていない目覚まし時計に目をやる。そこには大きく8時00分と記されていた。それは俺たちが普段乗り込む、滑り込みで学校に間に合う最後のバスの発車時刻のたった5分前だった。

「妹よ!これはひどくないか!?兄さんの貴重な二度寝タイムを……」

「最近は少し二度寝、といっってからが長すぎるからです。ちょっとお置きですよ」

「そんなあゝ」

そいつって舌を出す妹様。どこまでもよくできた妹でいらっしやる

……そうして俺、ふがいない兄は大きくため息をつくのだった。

忘れていた一大事

「ふう、間に合ったな……」

その後、俺と妹はぎりぎりバスに乗り込むことに成功し、無事学校に到着することができていた。

周りの生徒が駆け足で教室を目指す中、俺たちはゆっくりと進む。

「兄さんが毎日あと5分早く起きればいいんですよ。それだけで大分楽になります」

「ごめんごめん。今度から気をつけるよ」

「期待しないで待ってます。はい、これお弁当です」

そういつて妹は学校指定のカバンからピンク色の巾着を取り出す。それをみた周りの生徒の好奇の視線が俺たちに向けられるが、やっぱりそれが俺たちであることを認識すると、「ああ、なんだ。またお前らか」といった風にして去っていく。ほのかにあたにかいそれを受け取ると、俺はそれを鞆へしまう。

「あ、朝が忙しかったから受け取ってなかったか。わりいな、いつも」

「大丈夫ですよ、兄さん。それじゃあまた、放課後に」

俺と妹は二つ学年が違う。俺は高校三年生、妹は一年生だ。学年ごとに階数が違うので、階段前で分かれることが恒例だ。

「ああ、たまには迎えにいこうか？」

「いいです……恥ずかしいですし……」

「そうか。なら先に玄関で待ってるよ」

「はい、兄さん。それでは」

軽く会釈をすると、艶のある黒髪を揺らして妹は階段を上っていく。

「さて、俺も教室に向かいますかね」

残されてぼうつとしている時間もない、教室へと急ぐ。一日のため、喝としての独り言のつもりだったのだが、それを律義にも拾ってくれる野郎が一人。

「今日も朝からおアツいご様子で。よお、うらやましい限りだぜ」

「ああ、夏だからな。仕方ないだろ」

「おいおい、待ててっ！」

俺はそいつを無視して歩き出す。後ろにちらりと伺えた茶髪……そしてこの声、間違いなくアイツだ。

「大親友になんて態度をとるんだよ！ なあなあ、俺とお前の中だろう？ っ！」

俺の背後、緩み切った笑顔で一人の生徒、俺のクラスメイトである桐谷がいた。体格は俺よりもずっと大きい、180程あるうかという長身の男だ。

「お前な……つい最近知り合ったばかりじゃねえか。しかもゲーム友達、ゲーム以外の会話をお前としたことあったか？」

「……ないな」

「だろ？ そんなやつが親友って言えるのかよ」

あらかじめ言っておこう。こいつとはクラスメイト、であるだけだ。

少なくとも友達なんて言う階級にこいつは到達していない。

つい最近、俺が昼休み、図書室でとある格闘ゲームに興じていたところ、いきなりこいつは現れて、「一戦、どうよ」などと挑発的なセリフをふっかけてきたのである。俺は飽きれながら、見ず知らずの男の言うことを聞く必要もないだろうと思っただけでその場を去ろうとしたんだ。しかし、こいつはさらにすれ違いざまに俺の持ちキャラについての批判を並べてきたのだ。あれが弱い、あの攻撃は読みきれぬ、このキャラは使用価値がない、と。今思い返せば非常に、非常に安い挑発だ。しかし当時そのゲームにどっぷりとハマっていた俺はそれに乗ってしまった。一戦だけだ、そういつて通信をつなげて……気が付けば日が暮れていた。こいつ、ゲームの腕だけは確かなのだ。授業をさぼったことをあの後、妹にこっぴどく叱られたなあ……。

「いえな……ゲーム親友なんてどうだ!？」

「俺はそんなに悲しい人種じゃないよ。なんだか親友がゲームを紹介してしか作れないみたいじゃないか」

「ええっ! お前にとって親しい人間は妹さんと俺くらいだろ? 生粋のゲーマーがよく言うわ」

「あのな……いい加減おこるぞ?」

……否定はできないけどな。事実、友達といった存在はいるのだろうけど、俺にとって「親しい」存在は妹くらいかも知れない。

しかし……ご覧の通り、こいつはうざい。すごいうざい。基本的にはめんどくさすぎて、相手にしたくないほどだ。なので今日もまた、無視を決め込んで教室を目指すはずだったのだが……

「ごめんごめん! 悪かった! 俺も少しテンション上がりすぎてたんだ、許してくれって」

「普段からテンションが吹っ切れてるお前は区別がつかない。よって認めず」

「厳しいねえ。いや、しかしね、少年。これを見れば君もそうとは言っていただけないと思うよ？」

「何の話だよ？」

「俺のテンションが吹っ切れている理由だよ、少年」

そういつて胸をそらす。なにやら自信満々といった風だ。そうして忙しく彼は鞆をあさり始める。そして取り出されたのは一つの黒い紙。中心には白文字で……。嘘だろ……。？黒い紙に白い文字で刻まれたタイトルロゴ、それに俺は戦慄した。

「じゃじゃーん！なんと、わたくし桐谷は見事、例の抽選に当選！あの「センター社」が送る「MMORPGの到達点」になりえるとすら言われる、最新型MMORPG、「レイティスト・ワールド」の「第一次プレイヤー権」の入手に成功したのでした！」

ご、ごくり……。

「レイティスト・ワールド」

それはオンラインゲーム業界の船頭に常に立ち続けてきた「センター社」が放つ、渾身のオンラインゲーム、MMORPGである。発売前からそのクオリティの高さは、俺たちゲーマーを高ぶらせてならなかった。今までのゲームになかったさまざまな新要素、ゲームボリュームetc……。ゲームの開発経過が報告されるたびに世界が湧いた。

その中でもひときわに目を引いたのが「新しい感覚」と呼ばれるシステムだった。このシステムは簡単に言えば、ゲームの中にいるよ

うに感じることが出来るシステムだ。脳内にゲーム情報を機械からダイレクトに送りつけることによって、周りの世界を認識させず、ゲームの世界だけを認識させることができる。視覚を例にとれば、人間は本来、目で見たものを元に、視界を構築するところを、この「新しい感覚」を使用すると、脳内に直接出力された情報をもとに視界を構成できるようになる。つまり、目を介する必要がないということ。画面を見るという感覚がない分、画像の解析度、リアリティーなどは格段に上昇し、まるでそこにいるような感覚に陥るのだ。ほかの聴覚、触覚などにも同様の処理が施されている、逆に脳内から機械へ命令情報を出力することも可能で「動け」と念じることによってキャラクターが動くのだ。しかし「新しい感覚」の中では「念じる」といった感覚すら稀薄になるという報告が生まれている。どこまでもリアルな体に近い感覚、それが「新しい感覚」である。

あまりの期待ゆえにその多くのユーザーがその購入を望むことは明白であった。そこで問題になったのがネットサーバーの許容量であった。あまりに多くのプレイヤーがオンライン状態になってしまえば、サーバーがパンクしてしまうことは避けられない。そこで「センター社」が行ったのが徐々にユーザーを増やすといった作戦であった。様子を見つつ、それでもパンクしない見込みがあるならばユーザーを増やすという策だ。多くの批判の声も上がったが、「ベータ版」だと認識すれば問題ないだろう、との考えかたが多くをしめ、その騒動は終結した。

もちろん俺も「第一次プレイヤー権抽選会」に応募した。……ゲーマーの血が騒がないわけがない。

そして……

「お、おまえ……」

「ああ、そうさ。プレイヤー権当選者発表、今日だぜ？まさか忘れ

てたわけじゃないよな？」

「お、俺の名前、なかったの……か？」

「……まさかお前が忘れてるとはな。今朝相当に刺激的な事件があったと見える。妹様関連か？」

「あつたのか!？」

「さすがゲーマー、必死だな。話なんて聞いちゃいない。んで結論だけ言うなら、なかった」

俺の視界が深く淀んだ闇に沈んだかのように暗転していく。マジかよ……。なんでこいつが当たってるのに……俺が……。がつくりとうなだれ、膝が折れそうだ。しかしそんな俺の様子を見ても、桐谷の様子は変わらない。相変わらずニヤニヤしながら鞆をあさっている。なんだろうか。また何か取り出して、俺に自慢でもしようというのだろうか。

しかし、予想に反してやつが取り出したのは先ほど同様のもう一枚の黒い紙。それを取り出して彼はまたもや顔をゆるゆるにしながら言った。

「というのはうそ」。めでたくお前も当選してたぜ。優しい親友はお前のために証拠までコピーしてきてやったぜ。ほらよ」

そういつて渡された黒い紙。黒一色の配色の中、わずかに設けられた下の空欄には、俺の名前が活字でしっかりと刻まれていた。

急いで帰ろう

レイティストワールドの第一次プレイヤー権の獲得。舞い上がってしまいそんな幸福感の中、事実俺は舞い上がっていた。

学校の授業にはもちろんながら身が入らず、帰宅後のゲームプレイだけを考えていた。どんな職業にしようかなあ、ステータスはどうふろうかな……。今日のためにあらかじめ準備をしていたゲーム方針を思い出し、反芻していた。

きーんこーんかーんこーん

そして鳴り響く、六度目の授業終了を示すチャイム。それはすなわち解放の鐘である！

「お、おいっ！」

桐谷の制止を振り切って教室から飛び出す。扉がすごい音を立てて壁に衝突していたが気にしない。

廊下を駆け、目指すは三階。妹のいる一年生の教室だ。その三階にはすぐにたどり着いた。階段の一段とばしをするなんて、いつぶりだろうか。足が少しだけ熱を持っている。さすがのもしつぷりに涙が出てくるぜ……。

「妹よ！」

そして目の前、1Aの教室に妹はいるはずだ。いくらゲームが楽しみだとは言っても、いつもお世話になっている妹を置いていくわけ

にはいかない。扉を開け放ち、中の生徒に居場所を……

「に、兄……さん？」

なんだ、聞く必要もないじゃないか。扉の向こう、妹は目の前にいた。よし帰ろう、そう告げようとした俺に一つの違和感。

妹は制服をきていなかったのだ。更に言うなれば上半身には、つましい胸のふくらみを覆い隠す、純白の下着のみを着用している状態だ。それは滑らかな、傷一つない肌に調和して、一つの芸術品にすら見える。健康的に引き締まった腹部、そのラインに導かれるように下へ視線を落とすと、俺の視界には学校指定の体操着の姿が。

なるほど、前の授業は体育だったのか。それで今は着替え中、と。妹は少しだけ前屈みになってズボンに手をかけているところで固まっている。肩に掛かった長髪が、一束はらりと肩から落ちて、揺れる。

「……妹よ、帰ろう」

「……分かりました。急いで着替えますから、廊下で待っていて下さい」

「ああ、そうする」

まあ、一緒に暮らしている身だ。家でこのような事態にはよく遭遇する。互いになれたもので、少しだけ気まずい雰囲気になるものの、すぐに解消して仲良し兄妹に戻るのだ。

「それと……わかってますよね？」

けど、やっぱり家じゃないと……それは無理だよね。

「まったく、兄さん。みんなが着替え終わっていたからよかったものの、もしそうでなかったら大変でしたよ。言いましたよね、放課後、玄関でって」

「ごめんなさい……」

俺はみつちりとお説教を受けながら帰路についていた。帰りのバスの中では座席の隣でみつちりと、言い返すこともできずに一方的に丸め込まれていた。まあ……完全に悪いのは俺だけだ。

妹は基本的に何でもできる超ハイスペック人間だ。勉強、運動何でもござれ。しかしそれでいて交友関係が悪いなんてことはない。先ほどは妹が運動委員の仕事で少し遅れて教室に戻ったから、一人で着替えていた、とのことだ。いやあ、本当に妹だけでよかった……。

「それで、今日はどうしてそんなにテンションがおかしかったんですか？いつも私の言うことは一応、聞いてくれるじゃないですか」「えっと……新しいゲームが出てね……」

絶対怒られる……。

妹はそういうものに対する理解もある人間で、いわゆるサブカルチャーにも寛容な女の子だ。ゆえに新しいゲームの発売でテンションが上がる、そこまでは理解してくれるだろう。けど、そこから先、ゲームのせいで下着姿を見られたという理不尽さには、流石の妹の堪忍袋の尾もきれるだろう。そう思って身構えていたのだが、聞こえてきたのは妹の大きなため息であった。

「はあ……やっぱり当たってたんですね……」

「え？」

「レイティストワールド、ですね。新しい期待のオンラインゲーム。兄さんが初めて神社に行って、プレイヤー権の抽選について神頼みをしていたので記憶に鮮烈です」

「ああ、朝早起きして出かけたなあ……。あれ、ゲームの名前とか教えてたっけ？」

「私が個人的に調べたんですよ。そうしたら兄さんがいかにも「ドハマリ」しそうな内容だったので当選しないといいなあと思って神頼みしていました」

「なんでさ！？」

「良いんですよ、兄さんに教えてもらったゲームは楽しかったですし。けど勉強とか、ちゃんとしてくださいよ？最低限の責務を果たしていない人は娯楽に手を出してはいけません」

「母さんかよ……。勉強に関していえば手伝ってもらえば、いける」「二つ下の妹に勉強を教えてもらってる時点で何かがおかしいことに気が付いてくださいね」

「妹のハイスペックゆえ。これは言い切れる」

「まったく、兄さん……」

そうして俺たちは家に帰りつく。こじんまりとした一軒家。俺たちの両親は仕事に出ていてめったに一か所に集まることできない。なので親は俺と妹に学校に通うための一軒家をプレゼントしてくれた。普通の親なら年頃の子供二人を同居で置き去りなど、絶対にしないよな……。

鍵を回す。軽い歯車がはまる音がして、扉が開く。

俺たち「第一次プレイヤー」は今日の夜八時、一斉ログインの義務がある。それまでは妹にみっちり勉強を付けてもらおう。……当

分は勉強どころではないからな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4467ba/>

職業：兄妹剣士

2012年1月13日22時56分発行